## 絵画と出合う「この１点！」　田辺市立美術館　熊野古道なかへち美術館

≪新芽ふく頃≫
野長瀬晩花
1918（大正7）年頃
絹本着色
（148.2×51.2）
熊野古道なかへち美術館蔵

### 特別展　近代日本絵画の諸相　Ⅱ.日本画の個性

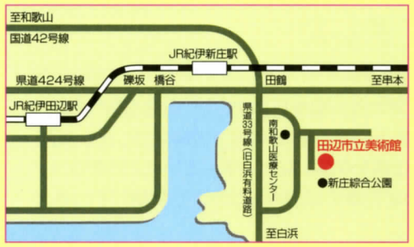
**会期：　9月23日（土・祝）～10月15日（日）**
**会期：10月28日（土）　～　11月19日（日）**

晩花の特徴のひとつである工芸的な構図の中に、デフォルメされて描かれた椿の花とたらの木。その筆法と色調は、影響を受けた画家の一人アンリ・ルソーを思い起こさせます。また、金泥で描かれているかと錯覚してしまう背景の葉の装飾は、1918年に亡くなったウイーンの画家グスタフ・クリムトが描いた月桂樹やアール・ヌーボーの影響などを想像させ、ヨーロッパの芸術を論じ進歩的であろうとした晩花の一端をみるようです。
洋画風日本画を誰よりも意識し、新しくて面白いと感じる表現方法を見つけると、因習や形式にとらわれず次々と試してみるのが晩花でした。
大正前期は、晩花が自由奔放に生き、自分らしさを主張しながら異色の画家として次々に作品を発表した時代でしたが、この作品もその中の一作品で、国画創作協会創立の頃に描かれたものと思われます。
（学芸員　山本　泰代）

## 美術館あれこれ④ 著作権その1 著作権とは

著作権（コピーライト）というのは知的財産権のうちの1つで、文化的な創作物を保護の対象とするものです。文化的な創作物とは、文芸、学術、美術、音楽など人間の思想、感情を創作的に表現したもののことで、これらを「著作物」といい、それを創作した人を「著作者」と呼びます。ちなみに、知的財産権にはほかに産業財産権というものもあり、これはいわゆる「特許」「登録商標」「実用新案」などといったもののことを指します。産業財産権は登録をしなければ権利が発生しないのに対して、著作権の場合は著作物を創作した時点で自動的に権利が発生（これを無方式主義といいます）し、この後、著作者の死後50年まで保護されるのが原則となっています。（あくまでも原則であり、例外的保護期間というのもあります。また、原則的保護期間が死後50年ではない国もあります。）要するに、大人であろうと子供であろうと誰かが創作したものには全て著作権があり、創作した人の許可なく使用したり勝手に作りかえたりしてはいけない、ということです。もちろん、法に基づく制度なので、これに違反すると厳しく罰せられることになります。（一定の条件を満たしていれば自由に利用できることになっていますが、著作権者の利益を不当に害さないように、条件は厳密に定められています。）
（学芸員　辰巳　充）

## 利　用　案　内




### 田辺市立美術館

JR紀伊田辺駅から明光バス「新庄病院前」下車、徒歩5分。

〒646-0015
和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770
FAX.0739-24-3771

### 田辺市立美術館分館
### 熊野古道なかへち美術館

JR紀伊田辺駅から龍神バス「なかへち美術館」下車。

〒646-1402
和歌山県田辺市中辺路町近露892
TEL.0739-65-0390
FAX.0739-65-0393

## 表紙作品紹介　佐伯祐三《リュクサンブール公園》1927（昭和2）年　田辺市立美術館蔵

佐伯祐三（1898～1928）は東京美術学校を卒業して間もなくにフランスに渡って以来、パリの風景を精力的に描き続けた。本作品は一時帰国の後、再びパリに戻った年の秋、佐伯29歳のときに描かれたものである（翌年佐伯は病に倒れ、その制作は永遠に絶たれる）。幾何学的な構図で画面が構成されているが、うらはらにそれを築いているのは奔放ともいえるような、動きをもった筆触の積み重ねである。異国の地の風景でありながら、それを描き出す佐伯の表現は手中に入ったものであり、パリの心象をこの作品に重ねて共有する人も多い。西洋から輸入された画材で西洋の対象を描いて緊張した画面を築きながらも、そこに東洋的な美意識や叙情のこもる佐伯の制作、作品は、近代日本の芸術家の背負った課題とそれに対する充実した回答の一つをみることのできるものといえるであろう。
本作品は田辺市出身の経済学者であり、日本学士院の院長も務めた脇村義太郎氏（1900～1997）の旧蔵品である。氏は美術にも造詣が深く、綿密な研究と洗練された審美眼によって優品の数々を収集されていた。日本の近代美術の流れを振り返る際に欠くことのできない本作を含む佐伯の秀作3点をはじめ、その収集品の多くを氏の逝去後、ご遺族から当館にご恵贈いただき、現在それは当館のコレクションの核となっている。
（学芸員　三谷　渉）

## 編集後記

今年の夏も、博物館実習の大学生の受入れ、新採用教員社会体験活動研修の小学校教諭の受入れ、演奏会等、様々な行事が重なりましたが、普段、接する機会が少ない方々との出会いの楽しさ、面白さ、新鮮さ、大切さを実感し、それが仕事への活力にもなる今日この頃です。さて、この秋から田辺市立美術館開館１０周年記念の特別展が開催されます。コレクション中の名作を中心に、芸術の秋にふさわしい作品が目白押しです。ぜひ、皆様のご来館をお待ちしております。
（本館　Y.M.）


田辺市立美術館NEWS
ORANGE Vol.5
発行年月日: 平成18年10月1日
編集・発行: 田辺市立美術館
熊野古道なかへち美術館


# ORANGE

田辺市立美術館NEWS
Vol.5

佐伯祐三《リュクサンブール公園》1927（昭和2）年　田辺市立美術館蔵

# コレクションの歩み

## 田辺市立美術館

田辺市立美術館が開館したのは平成8年11月1日ですので、今年はちょうど開館から10年の節目となります。当館ではこれを記念した展覧会「コレクションの歩み展」を本年6月24日から9月3日の期間開催しました。美術館の活動の大きな柱である作品の収集、コレクションの形成がどのようになされてきたのかを作品の分野ごとに収集時期を追って展示、構成しました。

ご覧いただいて当館のコレクションの軸が大きく「文人画」と呼ばれる分野と近代以降に描かれた絵画の2つにあることにお気付きになられたでしょうか。これは当館の開設の基点となった作品が、田辺市出身の実業家、脇村禮次郎氏（1904～1988）のご遺志により財団法人脇村奨学会から寄託いただいた故人旧蔵の文人画コレクションと、田辺市出身の洋画家、原勝四郎（1886～1964）のご遺族より寄託いただいた作品にあることによるものです。これらの作品を受けて平成６年度から作品の収集が始まりました。購入による収集が進むとともに、作家、所蔵家、及びそのご遺族の方々などからのご寄贈もあり、現在273点の作品を所蔵するに至っています。

この間特筆すべきは平成９年度に田辺市出身の経済学者、脇村義太郎氏（1900～1997）が収集された近代絵画の秀作を主とするコレクションをご遺族からご寄贈いただいたことです。これにより当館の近代絵画の所蔵品は、この分野の流れをうかがうことのできる充実したものとなり文人画とともに当館のコレクションの特徴を示す大きな軸となりました。

当館のコレクションを中心にして日本の近代絵画の諸相を「水彩画の近代」、「日本画の個性」、「表現主義の流れ」、「写実と抽象」の4つの章によってうかがう特別展を本年9月23日から来年3月25日にかけて開催します。当館の所蔵品の近代日本絵画の流れの中におけるその位置を再確認して提示するとともに、今後のコレクションの一層の充実にむけた収集活動にも結びつく内容となることを願っています。

（学芸員　三谷　渉）

### Information

開館10周年記念特別展　近代日本絵画の諸相
「Ⅰ水彩画の近代　Ⅱ日本画の個性」
前期：9月23日(土･祝日)～10月15日(日)
後期：10月28日(土)　～　11月19日(日)
「Ⅲ表現主義の流れ」
12月２日(土)　～　１月21日(日)
「Ⅳ写実と抽象」
2月10日(土)　～　３月25日(日)

**開館時間**　午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

**休 館 日**　毎週月曜日（但し、10月9日、1月8日、2月12日は開館）
10月10日(火)、1月9日(火)、2月13日(火)、3月22日(木)
展示替のための休館　10月16日(月)～10月27日(金)
11月20日(月)～12月１日(金)
１月22日(月)～２月９日(金)
年末年始の休館　12月26日(火)～1月5日(金)

**観 覧 料**　一　般　600円(480円)
大･高生　400円(320円)
小･中生　200円(140円)
※（　）内は20名様以上の団体割引料金
☆土曜日は小･中学生及び同伴する保護者や指導者の観覧料は無料

平成12年に刊行した当館の『所蔵品目録』。平成11年度末までに購入、または寄贈を受けた作品222点すべての図版とデータを収録している。販売価格1500円。

「コレクションの歩み展」のチラシ。前期、後期の二部構成で本年6月24日から9月3日まで開催。

## 博物館実習を行いました

学芸員の資格を取得するための課程を学んでいる大学生2名が8月1日から5日までの5日間、当館で博物館実習を行いました。作品の取り扱い、調査、展覧会の企画構成から展示の実際まで、等々、短期間でしたが実際に当館の学芸員が行っている仕事を体験しながら学んでいただきました。写真は絵巻物の展示を当館の学芸員の指導を受けながら実施しているところです。

# 展 覧 会 紹 介

## 熊野古道なかへち美術館

### ★特別展「日本画の個性」

田辺市立美術館特別展『近代日本絵画の諸相』のうち「日本画の個性」は熊野古道なかへち美術館との共催です。

**前期：９月23日（土・祝）～10月15日（日）**
**後期：10月28日（土）　～　11月19日（日）**

近代の日本画家たちは、西洋からの芸術文化と日本の伝統との間に立って「新しい日本画」の制作という課題を背負いました。その中で、1918（大正７）年、京都画壇に生まれた新進の画家たちによる美術団体「国画創作協会」は、活動期間は約10年と短かったものの、感覚や主観、個性の表出を重視して、多くの画家たちを喚起し、新しい日本画の表現の展開に特に大きな影響を与えました。本展では、この国画創作協会の創立メンバーでもあった村上華岳（1888～1939）、野長瀬晩花（1889～1964）などの作品を軸にして近代日本画の個性的な表現による作品を展観します。また、戦後の個性的な日本画の表現の充実を示した麻田鷹司（1928～1987）、稗田一穂（1920～）他の作品も紹介し、現代の日本画に通じる新たな表現の展開についても示します。

（学芸員　山本　泰代）

《那智（那智C）》　1960（昭和35）年
紙本着色　88.6×47.8
麻田鷹司（1928～1987）

《那智（那智C）》を制作した年、麻田は同じく那智をテーマとした作品《雲烟那智》で、現代日本美術展における神奈川県立近代美術館賞を受賞しています。堅固な画面構成の中に詩情をたたえた新しい「山水画」を描く画家でしたが、神聖な地の風景画は麻田の得意とするところでした。

《春巡る熊野》
1995（平成7）年
紙本着色
146.5×207.0
稗田一穂（1920～）

田辺市に生まれた稗田は、デッサン・油彩・日本画などを大阪で学んだあと、日本画家を志して上京します。独特の感性が生きた花鳥風月や、幻想的で重厚な作品を描く画家ですが、ここに見られる熊野は、近年の中心を成すテーマの一つとして特筆されるものです。

### ★館蔵品展「近世・近代の南画」

**前期:1月 6日（土）～2月 4日（日）**
**後期:2月24日（土）～3月25日（日）**

熊野古道なかへち美術館所蔵作家の一人渡瀬凌雲（1904～1980）は、大正から昭和の時代を南画家として生きた画家でした。幼い頃より南画家になる志をもって絵の勉強を続け、漢詩や書、短歌、俳句なども熱心に学びました。では、その「南画」とはどのような絵なのでしょう。いつ南画が生まれたのでしょう。この展覧会では、凌雲が精進し生きた南画の世界を、田辺市立美術館と熊野古道なかへち美術館の所蔵作品によって紹介します。時代とそれぞれの画家の位置を含め、広いところから南画の世界をご覧いただければと願っています。

前期では、桑山玉州、野呂介石ほか凌雲の師友たちの作品と資料で近世・近代の南画の流れを、後期では南画の重要なモチーフである四君子（蘭・竹・梅・菊）を描いた作品を中心に紹介します。

（学芸員　山本　泰代）

《観世音菩薩》　1925（大正14）年
絹本着色　117.7×26.3
村上華岳（1888～1939）

国画創作協会の時代、官能的なものと精神的なものの調和を試みた作品や、イタリアの宗教画などに影響を受けた作品を発表していた華岳も、大正後期頃を境に、次第にこの《観世音菩薩》のような仏画や風景画を主題とあるようになりました。晩年は殆ど画室にこもり、精神性の高い小作品を制作しました。

### Information

**開館時間**　午前10時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）

**休 館 日**　毎週月曜日･（但し、10月9日は開館）
10月10日（火）
展示替のための休館　10月16日（月）～10月27日（金）

**観 覧 料**　一　般　210円（160円）
大･高生　150円（120円）
小･中生　100円（70円）
※（　）内は20名様以上の団体割引料金
☆土曜日は小・中学生及び同伴する保護者や指導者の観覧料は無料